

新潟大学におけるベレント講演会は、2007年3月16日（13時30分から17時）に総合教育研究棟大会議室（D棟1階）で開催された。

講演会全体のテーマは、「21世紀高等教育の国際的ビジョンー『教授中心から学習中心へ』」である。このようなテーマ設定は、日本で現在推進されているFDの義務化（2007年、2008年）がきっかけとなっている。FD義務化の流れは、大学全入による学生の学力問題への対応という一般的理解にとどまるものではなく、国際的な高等教育改革やFD制度化の流れに連なっている。今後FDの実質化を図るためには、21世紀高等教育像がどのようなビジョンのもとで国際的にめざされ、それを支援するFD戦略はどのようなものか、理解することが重要であることから、今回の国際的講演会は企画された。

講演会の司会は濱口哲・大学教育開発研究センター長、通訳はI. メギール・大学教育開発研究センター・准教授が行った。配付資料は、プレ講演レジュメ、英語講演原稿の日本語訳と英語OHPの日本語訳Power Pointであった。第一部のプレ講演ではパワーポイント、第二部のベレント氏の関連基調講演ではOHPが使用された。

参加者は、司会者を含め32名であり、その内訳は学内から24名（学長1名、副学長1名、人文学部4名、医学部6名、歯学部3名、工学部2名、自然研1名、保健学研1名、職員2名、大学教育開発研究センター3名）、学外から8名（新潟県立看護大学1名、新潟産業大学2名、新潟医療福祉大学5名）であった。

講演会の内容は、長谷川学長による開会の挨拶に続き、大学教育開発研究センター専任による二つのプレ講演（「学習中心の大学教育」および「日本とドイツのFD事情」、それぞれの概要参照）と、ユネスコの高等教育改革事業の最前線で活躍すると同時にドイツで大学教授法の発展に貢献している、ベレント氏による基調講演、濱口センター長の閉会の挨拶で構成されていた。

ベレント氏の講演（153頁参照）は、ユネスコ・E Uが中心となって1998年にまとめた21世紀高等教育の国際的ビジョン（「教授中心から学習中心への転換」）について、EU・ドイツレベルで高等教育改革が進展するなかでビジョンの実現にはFD戦略が重要であることが再認識されている、という現状から説明された。次に明らかにされたことは、1960年代から始まる学習中心の新しい教授法の研究と学生の学習に関する研究や、その教育実践を支援するFDプログラム開発、1970年代以降の国際的協力によって21世紀高等

教育のビジョンとFD戦略が形成されてきたことである。FD戦略については、ドイツの事例（FDの義務化例、国内のFDセンターの増設と拡大、FDネットワーク化、ドイツ大学教授法研究協会のFD認証）が紹介された。FDプログラムの成功した事例として、ベレント氏自身が開発し認証され、国内外で実践してきたプログラムとプロジェクトが説明された。

プレ講演後と基調講演後に質疑応答の時間が設けられ、FDの定義や学習サイクル理論、FDプログラム、プログラムの認証、教育評価など多くの質問が出され、活発に論議された。

講演会終了後4月中旬に、参加者28名に対して電子メールによるアンケート調査を1ヶ月にわたり実施した。講演会終了後時間を経ていたこともあり、回収数は9と少ないが、寄せられた回答は参考意見として貴重である。結果の詳細は下記に掲載した。

講演については、全体的に「十分」「まあ十分」の説明であったと評価されている。問2. の自由記述にも、講演の意図は伝わっていることが見てとれる。FDプログラムの成功事例の説明については、相対的に若干低い評価である。OHP資料については改善すべき点が指摘されているが、講演会の方法も「十分」「まあ十分」であった。今後取り上げるべきテーマとして、教授法の評価法、米国やアジアの動向、現場のニーズに基づく授業改善法が挙げられており、大変参考になる。

講演会に関するアンケート結果

問1. 国際的講演会に期待していたことは、何ですか？

- ・私は今年に入ってから教職に就いたばかりでしたので、FDについて知識がなく、何かに役立てばと思いついて参加をさせていただきました。
- ・ヨーロッパで推進されている教育改革（高等教育）の現状及びその原動力となっている背景を知りたいと思った。
- ・ヨーロッパにおける高等教育の動向を知ること。
- ・国際的な動向を知ること、自分の課題を明確にすること。
- ・大学教育における教授法の国際的な動向を知ること。
- ・国際的講演に限らずFDに関する講演会では、授業法や教育研究の連携に関する具体的な方法論の知識を仕入れたいと思っています。国際的講演会においては特に、各国間での比較よりも、国際的に通用する魅力的な授業法や教育研究連携の在り方などに興味がありました。

- ・教授中心から学習中心の教授法への転換に成功した事例とその具体的方法。
- ・案内では「教授中心から学習中心の教授法への転換」ということで、是非参加して聞きたいという内容でした。
- ・しばしば、形式的になりがちな教育方法に対し、どのような評価方法があり、また、どのように評価されているのか。興味があった。

ドイツにおけるFDの動向	十分：3名 まあ十分：5名 やや不十分：1名	
「教授中心から学習中心の教授法への転換」を支援するFDプログラムの成功事例	十分：1名 まあ十分：6名 やや不十分：2名	

問2. この講演を通して学んだことは、何ですか？

- ・ヨーロッパ（ドイツ）における高等教育の動向。
- ・欧州におけるFDの位置づけ、FDをめぐる動向。
- ・ドイツと日本のFDと、日本の課題、自分の課題。
- ・大学教員となっても高等教育の発展に関する歴史は特段に意識することはありませんでしたし、あまり知識もありませんでした。今回の講演では、各国が取り組んできた高等教育改善の歴史を垣間見ることができたと思います。これは、国や大学などの大きな組織の運営に関する知識として有意義だと思いました。
- ・教育改革の必要性の源が日本とヨーロッパで少し異なるのではないかという気がした。
もちろん国による違いがあって当然であり、本学の改革は独自のやり方で進めるべきである。
- ・学習する学生の側に立った教授法の転換が、グローバルスタンダードになっていることを知ったこと。
- ・学習サイクル理論（原典を教えてくださいと助かります）。
- ・ドイツでの取り組みの実際をお話いただきましたので、また、学習する学生に軸足を置いた新たな教授法への移行ということで、パラダイムシフトについて興味深く、実践ではどういった内容か、プログラムをどのように進めていくのかということなど、勉強になりました。ワークショップ形式を重要視するとあったので、これからFDを考える時に参考になりました。
- ・教育者は臨機応変が大切、ということか？ これまでは、ある範囲の内容を伝えねばならないと、思っていたが。

問3. 講演の説明は十分でしたか？（該当する番号に○をつけて下さい。）

さらに必要と思われる情報はなんですか？

内 容	説明の十分さ	コメント
ボローニャ・プロセスにおける構造改革とFDの意義づけ	十分：2名 まあ十分：6名 やや不十分：1名	
「教授中心から学習中心の教授法への転換」とFDのルーツ	十分：4名 まあ十分：4名 やや不十分：1名	

問4.（学内外のFD連携活動）

①—今回の講演会の方法は役に立ちましたか？

配付資料・講演内容の提示法	有用度	改善すべきこと（コメント）
英語講演原稿の日本語訳	十分：5名 まあ十分：3名 やや不十分：1名	
英語OHPの日本語訳 Power Point	十分：6名 まあ十分：3名	OHPそのもの、つまり、日本語に訳さない資料をご提示いただいたほうがわかりやすかった。
通訳	十分：4名 まあ十分：4名 やや不十分：1名	

問4.（学内外のFD連携活動）

②—今後学内外のFD連携活動はどうあるべきですか。

- ・特定の教員・職員だけでなく一般教員も多数参加できるような活動が望ましい。
- ・ヨーロッパのみならず（ヨーロッパでもドイツ以外の国についても）アメリカ、アジアの各国における教育改革の現状について講演会やセミナーを積極的に開催していただきたい。
- ・私の大学でも取り組んでいますが、積極的に、大学の壁を越えて、呼びかけていけるといいと思いました。FDを苦勞して取り組まれていることが良く分かりました。私の大学でも、義務化？されることを念頭にどのように取り組むか検討がされてると聞いています。私は、FD委員会ではないのですが・・・
- ・全学教育機構の大学内における役割をFDを通して、もっと明確に周知すべき。
- ・より現場に近い、各教員が潜在的にもっているはずの授業改善への欲求に応える企画に興味があります。自ら授業改善すべき部分を発見する方法、改善方法の例など、大がかりなものではなく、各教員が個々に実践可能な小さなものについても知りたいと思っています。